

## 2014 年度 小委員会活動成果報告

(2015 年 2 月 7 日作成)

小委員会名	バイオクライマティックデザイン小委員会		主 査 名：長谷川兼一 就任年月：2011 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学委員会 (熱環境運営委員会)		委員長名：田辺 新一 主 査 名：須永修通
設 置 期 間	2013 年 4 月 ～ 2015 年 3 月		
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 持続可能な建築・都市の実現に寄与するパッシブ要素技術のデータベース化</li> <li>・ BD から見た環境建築の評価手法のプロセスの構築に向けた事例評価の試行</li> <li>・ 大学での教育現場での環境設計教育の実践例の収集</li> </ul>		
委員構成 (委員名 (所属))	委員公募の有無：無		
	主査：長谷川 兼一 (秋田県立大) 幹事：宇野 朋子 (武庫川女子大学), 築山 祐子 (旭化成ホームズ) 委員：金子 尚志 (エステック計画研究所), 菊田 弘輝 (北海道大学), 北瀬 基哉 (環デザイン舎), 小玉 祐一郎 (神戸芸術工科大学), 斉藤 雅也 (札幌市立大学), 宿谷 昌則 (東京都市大学), 菅原 正則 (宮城教育大学), 須永 修通 (首都大学東京), 高田 真人 (熊本大学), 廣谷 順子 (みつっデザイン研究所), リジャル H.B. (東京都市大学)		
設置 WG (WG 名：目的)	適応モデル WG：熱的快適性に関する ASHRAE や CEN の「適応モデル」に関する基準は、年間に渡る様々な地域と建物について現場調査した莫大なデータに基づいている。しかし、日本では現場研究が少ないため、日本各地の住宅やオフィスで熱的快適感調査を行い、莫大なデータ収集と統計的解析によって快適温度を明らかにし、高温多湿気候でも利用可能な適応モデルを提案する。		
2014 年度予算	175,000 円	ホームページ公開の有無：有 委員会 HP アドレス： <a href="http://news-sv.aij.or.jp/kankyo/s14/">http://news-sv.aij.or.jp/kankyo/s14/</a>	

項 目	自己評価
委員会開催数	5 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会 承認企画	
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	1. 本年度大会直後に、関西のバイオクライマティック建築を巡るツアーとして聴竹居ならびに甲子園会館 (武庫川女子大学) を見学し、環境建築事例の蓄積を図った。また、建築家や実務者とのディスカッションを通じて、BD 建築の環境調整に対する使用者の振るまい・行動に着目した設計プロセスの重要性を共有した。 2. 今年度の小委員会を 5 回開催 (1 回は予定) した。委員会開催を適応モデル WG と合同し、住まい手の環境調整行動を考慮した建築環境の評価手法の構築に関する議論を深めるとともに、環境データ取得のための調査の企画を進めた。 3. 委員からの話題提供により、大学での環境設計教育に関する事例を収集した。
委員会活動の問題点 ・課題	1. 小委員会メンバーは北海道から九州まで各地に在住しており、旅費の工面が難しく欠席を余儀なくされる場合が多い。インターネット環境を活用した会議開催についても検討する必要がある。 2. 環境データ取得のための調査を企画しているが、研究費獲得とのタイミングを整合させることが難しく、最新の知見を共有することに努めた。委員会活動をさらに充実させるため、年間の活動計画のロードマップを明確にする必要がある。

## 2014 年度 小委員会活動 自己評価

### (最終年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px 5px;">A</span> <span>B</span> <span>C</span> <span>D</span> </div>
<p>総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)</p>	<p>小委員会では、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1)国内外における環境建築の事例を収集し、これまでに蓄積した事例・研究データと統合し、建築・都市のデザイン事例（ハード技術）を整備</li> <li>2)BD から見た環境建築の評価手法のプロセスの構築に向けて、事例評価のための準備</li> <li>3)大学での教育現場での環境設計教育の実践例を収集</li> </ol> <p>について活動した。</p> <p>1)～3)のいずれも、5 回の小委員会の中で、毎回、話題提供を行い、事例や研究データを蓄積した。また、9 月上旬に関西地域のバイオクライマティック建築を見学し、1), 3)の活動へフィードバックさせた。</p> <p>2)については、適応モデル WG を中心として検討を進め、検討データを得るための調査を企画し、準備を進めた。</p>

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
  - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
  - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
  - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
  - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価（シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など）に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。